

## エカシ・フチの体験記録

【話し手】小川 早苗 さん

【聞き手】結城 幸司 さん

【聞き取り日】令和7年（2025年）3月19日

※カッコは編集において補足を行った箇所である。

結城：まずは生まれたところは？

小川：浦河町浜荻伏の漁場の長女で生まれました。

結城：漁場の長女？

小川：大きな小学校くらいある大きな漁場だったそうです。

結城：そうなんですか。

小川：生まれた時は豊かな家に生まれたんだけど、父の火の不始末で漁場が焼けちゃったの。それで漁師が怒って、家族4人は三石に。行くところがないから、母の祖父母のいるところに戻って、小さなポンチセに住わせてもらって。父は出稼ぎに行ったんだけど、招集令状が来てすぐ戻ってきて、そして戦地に行って、2日目に戦死しました。マリアナ諸島です。

結城：そうなんですか。

小川：だから父のことは私は知らないんですね。

結城：お父さんは、じゃあちっちゃい頃亡くなったってことですね。その頃ってアイヌのコタンっていうのはあったんですよね？

小川：もちろん、そのほかは見えませんでした。エカシ・フチがいて（私は）泣きながらいつもかわいがってもらって、腹が減るとね。（自分のことを）早苗って言えなくて「アナイの戦争で死んだ父さん返せ」って叫ぶの。郵便配達にくると「アナイの父さん返せ」って。シャモが来るのは郵便配達くらいなんで。そのころまだ飛行機が私たちの上を飛んで。鉄橋だとか橋を飛行機で落とすんですね。アメリカの旗が見えました。で、「アナイの父さん返せー返せ」って村中、コタン中、困ってしまうくらい叫んでみたいですね。だから、みんなに可愛がられて守られてきたっていうのが、私にとっては幸せなことだったと思います。

結城：小学校もそこなんですか。

小川：三石の延出小学校で。母さんは手の器用な人で、帯をほどいてドレスを作って、綿糸ほどいて。

結城：洋裁みたいな？洋裁というか、和裁というか。

小川：手縫いで作ってくれて。可愛い服を着て学校へ行くと、入学式の時母が一緒だからいじめられるってことはなかったけど、その次の日からその綺麗なドレスに泥んこぶつけられて、もう石投げられて。上がっていくと、先生が来て遅れてきたって殴るんですよ。先生が殴ることで、（その先生に）みんなから付け届けがあるらしいのね。アイヌを大事にしてるっていうのではなく、自分たちと同じようにいじめてるってことが分かれば、村の人たちは子どもを通して食べ物を届けるらしくて、もう本当に憎たらしかったですよ。そして長い時間、学校へ行かないで、コタンの豊かな家の子守に行っていました。そこで日に3回ごはん食べさせてもらえるから。母さんは私がそんな風にいじめられてるってことも知らないで、（私は）コタンの裕福なうちに行って

ごはん食わしてもらって、そして子どもの守をしていた。分かった時、母さんがおいおい泣きました。「お前は母さんを信じてくれなかったのか」って。中学校に行くようになってからは、3人の先生が私の後ろについてくれました。そして中学校できちっとあいうえおを覚えたりかけ算覚えたり。中学校になったら学級の委員長をやったり。3年生くらいになると風紀委員長。アイヌの子どもをいじめる人がいないかどうか。学校の校則の中で守る風紀委員長になって、その時の先生が、数学の先生と、社会の先生と、英語の先生が、絶えず私を守ってくれて、成績がいいと教室に貼り出してくれるんですね、成績表を。いじめた子どもたちは、みんな貧乏な農民の子どもなのよ。私をいじめることで生きている実感、あの子たちはしてたんだと思うけれども、気の毒なくらい勉強もできないし、着るものも汚いし、子どももたくさんいただろうし、大変な状態を見てきたと思います。でもそこで勉強して、それから教員養成所っていうのがあって、アイヌの子どもたちが夏でも手首までいっぱい長袖を着て。パンツもはけないでいる子どもたちを・・・言っているかな。貧乏人のシャモの親父たちが、その子たちを河原に連れてって、抱っこして連れてくんだよ。性的いたずらをしていたと思います。おんおん泣いてね。その子たちが中学生になった頃、私に「早苗ちゃんは私を助けてくれなかったでしょ、分かっているけども助けてくれなかったでしょ」って私に絡みついてきました。

結城：周りの子どもですか。

小川：うん、コタンの子ども。それから何年か経ったら「早苗ちゃん、ごめんね。怒ったけど、助けられなかったよね」って言って、一緒におんおん泣きました。だけど、考えてみたら、三石の歴史の物語みたいなので、船に乗って3日3晩、陸路歩いて2日、着いたところにクマとアイヌのほかいなかったって歌があるんですよ。クマもアイヌもいないって言って和人を連れてきたらしいのね。だけど着いたところでクマとアイヌだけで。すごい貧乏してその人たちも暮らしたと思います。旧土人給与地ってのが母さんの名前で3反4畝（※）ありまして、その田んぼを作りながら、私たち兄弟3人を育ててくれたんだけど、米は食べるだけなのよ。本当に母はどっかこっか行って働いている。私は妹を田んぼのあぜに寝かせて、私が田んぼの草取りをしたり、水を入れたり止めたりするのが私の仕事で。隣のおばちゃんも田んぼで草取りをするんですね。そして「早苗ちゃん、頑張ろうな」って。妹がね「ねっちゃん帰ろう、ねっちゃん帰ろう」って。そのまわりで狐がコンコンコンって鳴くの。「ねっちゃんコンコンって鳴いてる」って。「大丈夫だ、大丈夫だ。私たちのとこ来ないんだから」って隣のおばちゃん、田んぼの隣のおばちゃんですね、言ってくれて。自転車に乗せて家に帰って、それからごはん作って食べて、そういう生活をしてました。ただ、それが悲しいことではなくて、私にとっては戦って生きたひとつの物語でほかないという気がしますね。みんなが貧しかったんだから。私だけが貧しいんじゃない。小さい時は父さん返せ、父さん返せって、もうカラスのように騒いできたけども、中学校になってからは妹の面倒みながら生きてきましたね。でも本当の戦いの歴史っていうのは小川（隆吉）と結婚して、生協の職員だったんです、彼は。本当に子どもたちは地域の人に可愛がられた。小川が正直な人って見た通りでしょ。あの通りの人だから、人に迷惑をかけることないから。本当に周りの人に大事にされたんです。

（※）10畝で1反。1反は約991㎡

結城：それ何年くらいですか？

小川：子どもは、昭和38年頃です。

結城：俺の生まれる1年前だ。

小川：38年は長男が生まれた年ですね。

結城：じゃあ（私の）1個上なんですね。

小川：うん。39年に長女が生まれた。

結城：38年に、隆吉さんと結婚？

小川：そうです。37年か。

結城：その時は浦河？

小川：浦河です。本があるんだけど。

結城：『ウパシクマ』って本がね。隆吉さんはどっかの役員、生協の職員だったんですね。

小川：札幌へ出てきてですね、なんていうんだろう、子どもたちが差別されるのを知って、そして、ウタリ協会を作るのが・・・

結城：結婚してお子さんが38年に生まれて、それからすぐに札幌来たの？

小川：39年に長女が生まれて。42年くらいだと思います、札幌へ。

結城：42年くらい。

小川：はい。札幌へ出てきたのだけど、職が安定しないし。

結城：生協を辞めてこっち来て？

小川：うん、訓練校入ったんですね。でも、訓練校出たからって家族を養える職業はないんですよ。それでも憧れて彼は来たし。そこで、勤医協のAさんと出会って、勤医協を作るためにその人たちも組織作りに、寄付金集めに歩いていて。それで、（Aさんは）「アイヌも助けるのか、朝鮮人も助けるのか」って言われて。「そのアイヌを連れて来い」って言われたらしいの、大口の寄付をする人に。（私は）「一緒に行ってくれないか」って言われて、一緒に行ったら、ちゃんと寄付出してくれて、「ちゃんと病気になるったら治してもらうんだよ」って言われて。勤医協の作る運動とウタリ協会を作る運動と一緒に行く。寄付集めは一緒にやるけど、そこから寄付をもらうわけにはいなくて、運動のやり方を学びました。

結城：なるほどね。その頃は札幌アイヌ協会はなかったんですね。

小川：これから先。実態調査を、昨日、本を見たら2回やっていますね。1回目、全体の調査をやりました。その時の大変さっていうのは、貧乏なんですよ、どこ行ってもアイヌは。BさんとかCさんに、どこにどういふアイヌがいるかっていうのを教えてもらって。

結城：白老の？

小川：うん。札幌に来て、その地域を歩いて。本当に疲れて公園に行って座ってるんだ。Dさんの奥さんが私と一緒に調査員に任命されて。本当にみんな貧しくてね。ポロポロに疲れて。Eさんはその頃、道庁にいたんだけど、アイヌのやっぱり貧しさが問題になっていて。

結城：Eさんって誰？

小川：道庁の職員で。そしてウタリ対策をアイヌから担当させられて。それで、それを調べる基礎になるものとして、何人かのアイヌを実態調査に歩かせるってことで私たち歩かされたんですよ。もう本当に私が話すのは切ないけど、Eさんはこうやって顔に手を当てて、ぽろぽろ泣くの。「俺だって俺だって色気あったんだぞ」って。出世したいという意欲ね。それなのに、お前にその希望もなんも取られてしまったんだって泣

くんだ。でもおじちゃんに聞いてもらわないと、私たちも明日調査に行けないのよ、疲れて。そうしておじちゃんに話して、おじちゃんに何か食べさせてもらって、おじちゃんがあんこ餅好きなの分かって、私たちもあんこ餅を持って行くようになって。

結城：最初は北海道ウタリ協会石狩支部だったんだ。

小川：そうなの。実態調査しながら、ウタリ協会を作ろうかって。でも私たちは恵庭の近辺まで調査に行ってたから、石狩支部にしよう。そして石狩のアイヌももっと貧乏してたのよ。

結城：その頃、千歳も石狩も恵庭も札幌も参加したんだ。

小川：うん。でも千歳はそれから独立してちゃんと支部を作りますからね。実体調査の段階では調査に入るけれども、支部結成は札幌で石狩支部。生振で、Dさんの兄弟がたくさんいて。ほかにFさんっていう人たちもDさんのいとこたちでいて。昔はね、たくさん鮭が捕れて豊かに暮らしていたっていうんだけど、私たちが行った時は本当にとっても大変だった。奨学金の申請をするのに、親たちは、子どもの名前を書いて在学証明書を取りに行けないので、在学証明書を取りに行くのに私が最初行きました。Eさんが道庁を通して、子ども本人がね、高校生の本人が在学証明書を取ってもいいようにしてとか、制度をそれぞれ柔らかく見れるようにしてくれて。そして泣きながら泣きながらアイヌのために、Eさんが（ウタリ協会の）本部をきちんと定着させて、その後に私たちが支部を作って。そしたら石狩のアイヌがたくさん来てね。道庁からもシャモの役人がいっぱい来たんだけど、（アイヌの人たちは）みんな泣いて。なんでこんなにシャモがいるのにアイヌ協会なんだってことになって、シャモたちは少し引っ込んでもらって。そしてみんな道庁からEさん連れてきて、石狩支部を結成させたの。クリスチャンセンターでした、場所がね。みんな泣きながら「これができたら俺たちの生活はなんとか楽になるんだべ」って。GさんってDさんの姉さんとか、Hさんはクマ彫りをしてたから少し豊かだったんですね。ウタリ協会の会場、道庁の北大のそばの会館をね、アイヌに会館を貸せば、公安が警察がうるさいから貸したくないって断られるんですよ。で、Hさんの家で、支部会議をして、みんなHさんのとこ行ったら、腹減った腹減ったって言うんだ。Hさんがごはん食べさせてくれたり、どっかに飲み連れて行ってくれたり。木彫りだったから現金収入はあった。

結城：Hさん、その頃中央区に住んでた？

小川：中央区かな。北大の近く、北22条のあの辺。

結城：そうなんですね。

小川：みんなそこでごはん食べさせてもらって。うちの子どもたちはHさんに飴だとかチョコレートだとか買って持たされて。まだ子どもたちを置いて歩けるような状態ではなかったから。ウタリ協会作って。それから、住宅資金、奨学金を出してもらうようになりました。制度としてあったからね。だけど、その奨学金が卒業したら返さなきゃならない。

結城：今も一緒ですよ。

小川：40くらいまで、その学生だった人が、返済に。

結城：だから、いまだに石狩振興局なんですね。奨学金のやるところは。北海道庁でも、札幌市役所でもなく、なんで石狩なのかずっと思ってたけど最初がそうなんですね。

小川：字の書けない親たちの代わりに、今度私がやってたのを子どもたちがやるようになって。そしてあまりにもひどくてエテケカンパの会って日本中の少し民主的な人たちに

私が作品展をしたり講演をしたりして年に1万円寄付してもらって。そしてそれが300人くらいに、帯広の方の子どもたちとか。

結城：帯広のエテケカンパの会の。

小川：ここです。私です。

結城：エテケカンパってここがスタートなの？

小川：私です。アイヌの歌や踊りをやる先生方が応援して、事務をしてくれて、呼びかけの文章を書いたり、お金を集められるように、月に1回会報を出して、そして日本全国のシャモが応援してくれたの。

結城：今は帯広が一生懸命、エテケカンパをやってますけどね。

小川：それはキリスト教です、今は。本当に見るも耐えないくらい貧しかったの。そして学校に入れるなんて想像もつかないくらい、シャモの家の飼い犬以下の生活をさせられていた。それで何人かの子どもは今ね、ウポポイに勤めてるの。

結城：ちょっと元に戻りますけど、ウタリ協会札幌支部になったのは、石狩支部から何年かたってからですか？2、3年経ってから？

結城：最初、石狩支部で始まったんでしょ？Dさんとか小川さんとかが、最初。最初は千歳も恵庭も札幌も合同だったけど、そのうち千歳も出来上がり、それで、ウタリ協会札幌支部になって、そこでうちの親父（結城庄司）もいたんですか？

小川：いました。北日本民芸の建物の中にIがいて、その近くに（結城）庄司さんがいたの。だから私が実態調査に行ったら、とにかく疲れるから。みんなで疲れを取ってやろうということで、Iが「子ども連れて来い」って言うんで。その頃、次男が生まれてたので、背負って行くのね。「なんでもいいから言え」って。言うと気持ちが楽になるから。EさんとIとあんたのお父さんと、私たちの疲れを取ってくれて。実態調査が終わって石狩支部を作って、そして今度は共同利用館。

結城：最初は実態調査だったんだ。

小川：そう、実態調査から始まりました。それで生活館を作れっていう要望書を出して、それが板垣市長の時代だと思うけど、なんとかなって、その頃で札幌支部になったと思います。

結城：札幌支部が出来上がってから、今の共同利用館？生活館もその後が出来上がった。

小川：一緒に一緒に。

結城：だいたい同時に。

小川：市に予算要求するのに、石狩支部じゃ、うまくないので。

結城：なるほどね。

小川：札幌支部にしたと思います。

結城：そうなんですな。初代（支部長）は小川隆吉さん。

小川：そうです、小川隆吉ですね。

結城：あとはそうだな、当時で、Jさんとか。

小川：事務局で、学校行ってるから、字が書けるので手伝ってもらいました。それから・・・

結城：Kさんもね。

小川：Kさんもね。風呂に入れないとか、ストーブの上の湯沸かしがひっくり返って、子どもが怪我したとか、みんな私たちが行って、病院にかけるの。生活保護を適用するようにした。勤医協のおじちゃんたちにどうしたらいいか聞いて。そしたら、Kと一緒に

に酒を飲んでた人が市役所の職員だったんだって。「どうぞどうぞ飲んでください」って言ったら、「アイヌの酒が飲めるかい」って言われたんだって。市役所の方があわくってね、ウタリ協会の方に謝りに来たり、いろんなことがあの頃はありました。でも団結してた。

結城：なるほどね。

小川：本当に団結してやれましたね。

結城：わかりました。最初、勤医協の設立で動いて、やり方わかったんで、石狩支部が出来上がり、ウタリ協会の札幌支部が出来上がり、で、初代支部長が小川隆吉さん。小川隆吉さんになって、その頃、早苗さんは、エテケカンパとか。

小川：その頃やってない、ずっと近年だけですから。

結城：子どもたちの支援とか、貧困の解除とか、家族ごと面倒を見ていたみたいなイメージがちょっと強いですね。

小川：そうです。本当に生活保護の申請することと、それからどうやったら高等学校に行けるようにするか。

結城：今はまあ、みんな行けますけどね。

小川：行けてないの、今だって。だめよ。なので生活館で学習会をしたり。でも私の方が疲れてきて逃げたんですよ。そしてやっぱり気になってエテケカンパの会をスタートして、刺繍ができるようになってから、そういうシャモ社会との交流ができるようになったから。エテケカンパの会でお金を集めて、人間の顔が明るくなって安定してきた。大方、エテケカンパの会のお金でみんな入学してます。最後まで面倒見たかどうかって言ったら分からないけど。

結城：そういう子どもたちの、早苗さんは何を大事にしたかったんですか？

小川：教育です。

結城：教育ね。

小川：安定した仕事に就かせたい。

結城：まずは貧困の問題が大きくアイヌを渦巻いてて、その最初の被害者が子どもであるから、子どもに対して協会としていろんな力を添えたということですね。その流れでエテケカンパを作り、その頃まだ教育相談員もなかったんですもんね。確かうちのLが入学するときに学校差別があって。

小川：そうよ、入学説明会の差別があって、それで学習会をやったり、それから奨学金を申請したり。

結城：ね、それでそこから教育相談員。

小川：そうですね。

結城：職業相談員はあったんですか？

小川：私もちゃんと覚えてない。みんなの生活のことを、生活を守るために生きたという感じが。毎日毎日市役所通いして、しっかり公務員並みに顔を知られてしまって。でも嫌だと思わないで勉強になりましたよ。隆吉がいる時こんな話聞いてくれればよかったね。

結城：その頃、うちの親父は何年くらい？

小川：教育相談員も何年かしてましたし、（生活館の）管理人もしたし。

結城：協会ができた頃はいなかったんでしょ？

小川：あの頃はね、オルグみたいにして。

結城：釧路からね。

小川：Mエカシもここに来て泊まって。

結城：へー、そうなんですか。

小川：Nさんを連れてきて。次男が踊ったり歌ったりするのはNさんさ。学校から帰ってきたら抱きしめて踊って歌って、Oさんっておばあちゃんもいて。この人も次男に一生懸命チャピーヤピーヤピーヤ（と歌って）。

結城：上川の人？

小川：うん、ワッカウエンベツ、旭川出身でね。苦労したおばあちゃんでした。上におばあちゃんの作品があるから見てください。

小川：私ね、Pさんに会ったんですよ。Q（北海道大学医学部教授）の助手だった人。彼女の教室に通って、私は事務局をやっていたので。Pさんのアイヌ刺繍の教室を（職業機動）訓練で始めました。その予算取り付けしたのが、Eさんです。

結城：Pさんは札幌に住んでいたんですか？

小川：札幌です。もともと札幌生まれの札幌の人です。

結城：お父さんも札幌生まれの人ですか？

小川：お父さんは宮大工の人で、豊平の方で住んでいました。

結城：Pさんにお世話になった人が多いですね。

小川：いっぱいいると思う。本当によく教えてくれました。私の今があるのもPさんとか、北大のR先生とか。資料を見させてくれるんですよ。そばにいてわんこみたいにくっついて資料を見て。そして、真似をして作りました。だから、みんなにお世話になって、今があります。この家も私の働きで買いました。

結城：石狩支部の時から機動訓練はあったの？

小川：いや、あの…

結城：あれもやっぱり運動だったんですか？

小川：生活館ができてから、生活館を運営するのにどうするかってことで、じゃあそこで刺繍をしたらいい。でも、刺繍はあそこまで行くのに遠いですから。交通費もかかるし、教えてくれる人もいなきゃできないということで、Eさんが職業訓練にして、手当もつくし。

結城：Eさんという方の功績は大きいんですね。

小川：大きいですよ。もう泣きながら、ここからポロポロ涙流して。

結城：もともとどこの人ですか？新ひだかの人ですか？

小川：新冠、新ひだかです。Eさんというのは本当に愛の塊みたいな人でした。Sさんのおじさん。

結城：ああ、そうなんですか。あの、江別の？

小川：こうやって泣くときにね、S、Sって泣くの。おじさんの子どもかと思って、おじさんに女の子一人のほかいなくて、後継ぎしてほしいと思ってたんでしょ。

結城：まあでもSさんは学校の先生になったからね。

小川：でもあの人、認められて、みんなに求められて先生になってんだよ。

結城：頭のいい人だったの？

小川：頭、今もいいね。だけど、酪農大学の学校側から呼ばれて、どっかの牧場のお手伝いしてたらしくて、それを認められて呼ばれて、大学で勉強して。先生になろうとは思

ってなかったんだけど、先生にならないかと言われて先生の資格をまた取って。だからアイヌのお世話にならないで。私のひとつ下だから、すごいちゃんとした人ですよ。

結城：すごい人たちがいっぱいいたんですね。

小川：奥さんも今も刺繍の先生をやられてるし、私たちもみんなPさんのおかげで今があるんですよ。たくさん札幌支部でも習ってると思う。

結城：じゃあ、その初期の頃の機動訓練で、先生やったのもPさん。

小川：はい。Tとか、U。

結城：アヌタリアイヌ（誌）のメンバーさん。

小川：うん、アヌタリアイヌ、そうです。アヌタリアイヌを助けてやるなんてその頃、気もつかなかったです、私。

結城：小川さんからしてみれば札幌の動きだけでも大変だったでしょう。

小川：本当に本当に。私も生活保護になっていくからね。小川（隆吉）たちは木彫りのアイヌ民芸品企業組合立ち上げて、4年か5年くらいで子どもが学校で生活保護を事業補助金として取らせたんですよ。そしたら子どもたちが、「お前給食費を払わないで給食を食ってる」って。「なんでそうなんだ」って石をぶつけられたり、いろんなことがあって大変でした。子どもたちもかわいそうでした。そしたら「企業組合を潰すかい」って言われて、返事はできなかったけど「子どもたちを守りたい」って言いました。

結城：企業組合を作ったけど、なかなか食べていけなくて、保護を受けて。その時に、いろんないじめがあったりして。でもそういうことをやらしてもらわないとね、すべてが始まらないですよ。

小川：そうなのよ、補助金を出して、ちゃんと独立した企業としてやらせればいいんだけど、市役所側もわからないし、参加しているアイヌの側もよくわからなくて、彼らなりに苦労して。Iも最初是一緒だったんだけど、その頃、（あなたの）お父さん（結城庄司）も来てた。お父さんは事務的なことを外側からまとめてくれていたと思うんです。政党間のことだとかバラバラにならないように。でも、なんていうんだろうね。本当に切なかった。隣近所に親父がいて、「あそこアイヌの家だから何やってもいい、子どもをいじめてもいい、何やってもいい」って言うんだって。子どもたちが食べてるもの取って食うとか。いじめるとかすごいあるから（その子どもたちに）「どうしたのあんたは？」ったら、「父さんはね、ここの家はアイヌだから何やってもいいって言ったの」って。「あんたの父さんそう言ったんだね。分かった、これからあんたの家行くからあんたも一緒に行こうって」連れて行ったら、父さんいなくて、お母さんに話をしたらその家いなくなった。もう本当に子どもたちがここに暮らさなきゃよかったのにいじめられるのよ。本当にかわいそうだった。私たちはいじめられても、コタンだから、エカシやフチがいるし、みんな守ってくれた。ここではそういうものないわけだから。

結城：なるほどね。

小川：もうかわいそうだった。

結城：そうか。浦河とか三石みたいに、周りで守り合うほど近くにも住んでないですね。

小川：20人对1。男の子、学級に20人いたら20人がまとまって。長男をいじめる。次男の時は、どうしてこうなるんだろうって。私がアイヌ模様の服を着ていたんですよ。そしたら（先生が）「お母さん、それを欲しい」って。「先生どうするのよ、これ」

万5千円するよ」って言ったら、「いいよ、私のお父さん絵描きだから。大切なことが分かるからいいよ」って。先生がアイヌ模様の服を着たら、学級からアイヌ（って言われなく）なくなったの。校長先生がね、（その先生に）「なんでお前そんなもの着るんだ」って言ったんだって。（その先生は）「私の学級のことだから口出さないでちょうだい」って。先生がアイヌ模様の服を着たら、次男がアイヌって言われなくなって。次男だけはまともに成長しましたね。長女は勉強のできる子だったから。かわいそうだったけれど戦ってくれた。私たちがやってるのを見て子ども心に何か伝わるらしくて戦ってくれましたね。だから、なんていうんだらう、複数の民族がこの国に暮らすって、きちっとした先住民族政策を持たないといけないのよ。だからEさんがそれから何やったと思う？私と妹が作った刺繍の着物をね、袋に入れて。世界17ヶ国にそれを持って行って展示して。写真撮ってもらって新聞に出してもらって。それを持ってきて本部に報告するの。そうやって外国へ私たちをやって。

結城：Eさんって方、すごいですね。

小川：もう本当に。苦しい時代が、私とかVとか、小川隆吉とかDでなきゃわからないのよ。本当に。いやでもね、今思うとね、おっかないことやらされてるんだよ。飛行機の時間と飛行機のマークがね、一緒だったらその飛行機に乗って行けて。

結城：どういうこと？

小川：アメリカに行く飛行機で、それが何時何分にどこを出る。私たちが持っている飛行機のマークと時間が合わさったらその飛行機に乗って、オーストラリアに行けとか、アメリカに行けとか。おっかない、今思うとね。

結城：よくわかってないから、どうやって乗っていいのかわからないから、マークだけ見つけて行けど。その頃、早苗さんも海外に行ったんですか？

小川：行った。アラスカだとか、フェアバンクスだとか。もう本当におっかないこと。

結城：じゃあ、みんながほとんど行ってない時に。Eさんが海外でいろんなものを主張してくれたんで、行ってきたの？

小川：海外はちゃんと先住民族という政策を持ってやってるから。そして運動もできてるから、それはできたの。

結城：僕らよりも全然進んでますからね、昔からね。

小川：それを教えてもらうためには、こういうものを売ってた時どういう扱いを受けて。それからですよ、国がアイヌ政策を立てたのは。国会議員だって応援してくれる人ってそんなにいなかった。でも、いっぱい体の中にあるのに言えないから。本当に長い戦いの歴史。

結城：長い戦い。

小川：学校で20人对1でいじめられるのね、長男は。担任の先生たちが3人くらい玄関に出てるの。それを見てるのね。注意しても注意してもやめないから、（先生はいじめた子どもたちを）先生の机にこうやって手をついてお尻を3回叩くんだって。大きいものさしで。叩かれる数が20人に達したので、みんな一団となって長男をいじめ始めて。

結城：そんなことがあったの？

小川：あったよそんなの。帰る時間になると学校のそばにいて、私や妹が用事あって歩くふりして歩いてるんだ。先生方が地域のお母さんたちに言うんだって。「アイヌをいじめないでほしい」って、「お母さんたちから子どもに注意してほしい」って言ったら、

(地域のお母さんたちは)「アイヌのことよりも今日の社会科のテストはなんなの」って。「もっと子どもたちの勉強を見て、アイヌのことなんかどうでもいい」って。みんなが集団で言って、学級の委員たちが。私が学級の委員になろうとしたらね「アイヌの学級委員にするのは嫌だ」って。

結城：そんな差別があったの？

小川：あったよ。うちの子どもたち教育期間中に。担任の先生がたまたま私たちを理解できる先生で、その先生がちゃんとお母さんたちを納得させてくれて、学級委員長をやりました。いろんなことをやりました。おっかないことも知らないで。外国に行ったのも17カ国もあるから。

結城：すごいですね。

小川：それから黒人の大統領だった、あの人の地域も行ってきた。あそこが彼の家だよっていうのを見せてもらって。韓国の人がアメリカで大学の先生してたんですよ。そして彼の家泊まって。本人たちいないのに。そして近所の店で野菜買って食べて。大学で作品展して、そこでアイヌ料理作って、先生方が発泡スチロール持ってそのアイヌ料理をもらいに来るといようなことをしましたね。

結城：大変な苦勞だったと思いますよ。

小川：それがあるから強くなれた。

結城：それでもやっぱりお母さんが帯ほどいて手仕事やったりしたから、なんとなくそういう手仕事は嫌いじゃなかった。

小川：好きではなかったと思うけどね。おばあちゃんたち、フチたちが「このまんまでいたら、アイヌがなくなるからお前の娘に、お前が教えてやらせる」(と言って)。Wばあちゃんわかる？

結城：もちろん。

小川：あのばあちゃんに、「ばあちゃん、刺繍を教えて」って言ったら、「お前の母さん、なんでもできるんだから俺はお前に刺繍だけ教えない」って。「ハポ(お母さん)から習え、ハポから習え」って。Xフチとかね。

結城：有名なね。

小川：そこにサラニブ(背負い袋)いっぱい積み上げてあるんだけど、そのサラニブなんかも。血のつながっている人たちの愛と、それと血のつながっていない人たちが私たちにものを教えると、もうすごいよ。「お前金払う現金あるのか？なかったらこのサラニブを買え」って。Cばあちゃんは泊まらせてくれて。Yの奥さん、Zさんも泊まらせてくれて。aさんとか。もうみんな買わせられました。刺繍の刺し方とかサラニブの作り方とかすごい厳しいと思った。それから、bさん、二風谷のね。いきなり「着物買え」って。どうしよう私、お金ないのと思ってたら、「お金、今はいいから持ってけ」って言われて。そしてそこでもサラニブでっかいの2つ背負わされて。でもどうやってやってきたんだろうと思うんだけど。おばあちゃんたちも生活があるからさ。私たちみたいに習いたい人からちゃんと小遣いもらわないと。おばあちゃんたちの時間も使うわけだから。

結城：でも、そうやって生活しないとね、アイヌのこと、ずっとやってられないからね。

小川：そうなの、そうなの。だからばあちゃんたちが言うことも当たり前のことで、国の施策で何も無いわけだから、自分たちが作った着物を世界に持って歩いて行き、行商に

もならないんだ。本当に自分で作った大きなデニムのバッグに入れてき、妹と二人でしょって歩くの、本当に。

結城：男はクマの木彫りが売れた時代だからね。そういう人はいたけど。

小川：着いたところでね、インディアン本部が私たちに来い来いって言うの。行ったらね、「ウタリ協会の電話番号を教えろ」って。送り出した側がどんなに心配してるかっていうことを、現地の方は分かるんだね。そして電話入れて、（ウタリ協会の）本部に電話して、Ainu I love youって電話入れるんだって。cさんが事務局長のときに（その電話を受けて）「あいつら生きてる」って。「インディアンに守られてるんだ」って。あちこちからインディアン本部から来い来いって行けば言われて、そしてみんな連絡し合ってたんだね。私たちが地理分からないのに向こうの方が先に分かってたんだと思う。でも今考えるとおっかないよ。よくでもおっかないこと知らないで歩いたと思う、二人して。

結城：海外ね。

小川：国内はまだね、あれだったけど海外はおっかなかった。

結城：今の先駆者みたいなところだったんですよね。

小川：希望してなったんじゃないかと、結果としてそうだったと思う。分からないのよ。社会の仕組みが。だからまず、dさんの子どもたちを訓練校に入れるために、基礎学力を作るのに北星大学のe先生の学生たち連れてきて。

結城：e先生の奥さんって誰？

小川：U。

結城：あの人もウタリですよ。

小川：ウタリです。

結城：二風谷の。

小川：Uと、それからTちゃんが妹。

結城：姉妹か。

小川：その上にお姉ちゃん。美容室をやってるお姉ちゃん。もう死んじゃったけど。でもね、e先生の子どもたちで何人かは高校入れたんだけど、ものすごい大変だった。そして、高校に入るのに受験に行くのにもお金がかかる、交通費がかかる。試験代がかかる。

結城：今、無償になりましたけどね。

小川：わからないからさ、なんで金かかるんだって。私が悪者にされるのよ。いやいやどうすると思うけど。

結城：なるほど。受験料はね。

小川：Aさんたちがみんなに説明してあげてくれて。シャモの応援ももらいました。みんなでお昼ご飯は生活館で炊いて食べさせて。ご飯炊いて食べさせるの結構大変なのよ。毎回、カレーライスってわけにもいかないから。アイヌ料理も作って食べさせて、それが学生たちの思い出になっているみたいですね。

結城：早苗さんは生活相談員をやっていない？

小川：私に給料出るような仕事、誰もさせてくれなかった。取り合いですよ。隆吉をちょこっとね。

結城：教育相談員ね。

小川：入れたんだけどね。（あなたの）父さん（結城庄司）も何年かやったよ。

結城：親父は最後は、教育相談員で亡くなったと思うんですけど。

小川：ほんとに説明いらない理解者でした。Iとかね、父さんは。

結城：じゃあ1回、休憩入れて、その後、Iさんとかそういう人の話を聞きますね。

<休憩>

結城：Iさんの話とか、当時の札幌に来て、たくさんの子どもの頃からの差別を受けながらも頑張ってるね。隆吉さんと出会ったことがすごい大事なきっかけで、札幌来て、札幌のまず石狩の協会を作って、それから札幌支部になって行って、最初からIさんはいたんですか？

小川：Iは会員になりませんでした。

結城：最後までなってないの？

小川：なってない。企業組合を作る時もIはいてくれて。だけどそこにいたら自分の仕事成り立たないのが分かって元に戻りました。だからIっていうのは、私が実態調査をさせられた時に、私が疲れ果てているだろう。アイヌの実態を見てね。そしてIもおおよそ想像つくのよ、あの年だから。だけど私にすればまだわからない。社会がわからなかったから。Iが案じてくれるっていうことはなんだかわからないで、Iのどこ行くと安心して帰れた。Iと父さんとして、札幌のアイヌの実態を聞き出してくれるの、二人は。

結城：本部にも入ってなかったんです？

小川：うん、どこにも入ってなかった。

結城：でもアイヌを語る会はじゃあ。

小川：I中心です。Iを中心にみんな寄付してくれたから。Iは結構信用あったんですよ。

結城：あれだけの作家さんですもんね。

小川：電話をくれてね。来いって、疲れたべって、休みに来いって。今はね、山菜はどんな山菜が出て、うまいぞって。食いに来いって。お前の話を聞きたいし、お前の顔も見たいしって言ってくれて。奥さんとも仲よしだったから。

結城：fさん。

小川：fさん。おいでおいでって奥さんから電話が来るんだ。

結城：今、札幌住んでらっしゃいますよね。自分で会を作って、アイヌじゃないけど若いアーティストを育てたりとか。去年、一昨年かな、対談しましたよ、僕。当時のIのお話をね、聞いて。僕が展示会やる時もしょっちゅう、来てくれます。

小川：かしこい人ですよ。

結城：早苗さんはね、自分でちゃんと刺繍で食べた人だから、自分でこうやってアピールするのも上手かもしれないけど、Iさんはあんまり、そんなに上手でもなかったみたいだね。ファンの人が多かったからね。

小川：いつもエカシたちと同じようにIは私たちを支えてくれた。それ、父さん（結城庄司）も同じなのよ。うちの子どもたちを見ては、幸司、幸司って。あの人、自分が心臓悪いの知ってたんだね。41でしょ、死んだの。

結城：そうですね。42の手前です。あまりにも若いですよ。

小川：危篤状態だから来いって電話来て。行こうと思うの、人の家の玄関に車ぶつけながら行くのね。これは歩いたらダメだなと思いながら最後はちゃんと看取ってやれって言われながら別れはできないで。

結城：あの時代に、早苗さんも隆吉さんも親父もIさんも頑張ったから、今があると思ってるんで。

小川：本当そうですよ。支えあうものなかったら居れない。

結城：小川さんから見て、昔は貧困があって、学校に行けるアイヌたちも少なく、そのためにこの札幌っていう大都会で、いろんなシステムを作りながら協会も固めながらやってきたと思うんですけど、今の早苗さんが見て、アイヌがこれだけはやってほしいと思うこと、もしあったら言ってほしいんですけど。

小川：やっぱりね、アイヌの歴史をウタリ協会の会員もその家族もきちっと勉強してほしい。そして自分たちの未来を仲間と一緒に作り上げていく。やっぱりね、自分たちの民族として生きていきたい。「アイヌとして生きていけ」って言い続けたエカシヤフチ、両親の心を受け継いで生きていってほしいと思います。組織をきちっと作って、例えば、奨学金にしても返さなくてもいい奨学金にするとか。補助をしているふりをしながら、結局は貧乏を加算していくようなやり方をしているこういう制度を改善していくとか。住宅資金だってあるけど、誰も今借りる人がいないそうですね。

結城：銀行の方がかえって安いところがあります。

小川：本当にびっくりするようなことばかりいっぱいあるから。みんなが団結して信じ合って助け合って、補助金だけ誰かが団子になって補助金取るだけがウタリ協会ではない。自分たちの文化を発展させていくこと、民族の伝統的儀礼を受け継いでいくこと。そして、アイヌの住む場所をちゃんと確保してほしい。

結城：同い年の方でもちょっと下の人でも、アイヌって言えなかった人たちがたくさんいるじゃないですか。

小川：そうなのよ。いじめられたから言えないのよ。

結城：どんなにひどかったかっていうのは、やっぱり今のうちの息子たちも含めて知らないんですよ。本当にアイヌって名乗れなくなるぐらい。（今の時代の）僕は（アイヌにルーツがあると）教えてあげることできるけど。今の20代の子はどんなにきつかったのかっていうのがよく分かってないので、そういう話もちょっとしてくれるといいなと思います。

小川：すごいおっかないと思うのは、孫が介護施設で働いたら、アイヌ呼ばわりされて。アイヌのじいちゃん、ばあちゃんに関わりを持って大きくなった子だから、かわいそうなじいちゃんばあちゃんを大事にするのよ。率先して面倒を見るから、会社の人たちにも大事にされる。そうすると、それを妬んでアイヌ呼ばわりする（人がいて）。もうボコボコになるほど殴ったんだって、アイヌ呼ばわりした人。で、家帰ってきて3日くらい泣いて寝てるの。そのまま起きないんだ。

結城：ひきこもりになっちゃった。

小川：ひきこもりになりましたね。長男の場合は、言わないんだわ。アイヌ呼ばわりされて殴られたの？って言ったら、答えないけれども、顔に傷つけて殴られてるでしょ。

結城：多分、お母さん、お父さんに心配かけまいとね、言えないんだと思うんだけど。

小川：いっぱい心に傷を持ちながら生きている。

結城：いまだにね、本当にそういう子たちも実は多くて。インターネットとかああいうのは発展してるから。

小川：そうなのよ、逆にね。差別をいっぱい受けてますってことを言っているのか悪いのか。アイヌの歴史をきちっと教科書の中で教える。サンキュー、イヤイライケレ、ありがとうってこの3つの言葉がね。一番最初にイヤイライケレがあって、ありがとうがあって、サンキューがあるならいいけど、アイヌの言葉も教えない。（アイヌの）数詞も教えない。何にも教えないでさ、差別だけをすることを教えられてきたシャモの子どもたちに「お前たちそれは差別なんだよ」って言ってもわからない。デイケアに行ってるね、私がアイヌの本、デイケアで読んでるんですよ。そうすると、無理くり、私から本を取ろうとしたり（する人がいて）。私なんにも説明しないんだ。介護の人、責任者たちがすごい困ってる。（介護の人が）「僕もアイヌの差別ってどんなことを言ってるのかわからないよ。小川さんをどうやって傷つけてるかわからないよ。ごめんね」って言いながら。でもね、シャモたちも良い仲間のようなふりをしながら、結局自分より下の人に押しえつけようとする思いがある。みんなと同じ体操をして歌を歌ったりするんだけど。その時にああ、こういう人たちはどんなところで働いて、どうやってここに来てるんだらう。でもデイケアに来れるということは、そういう金銭的な組織作りがされてるから来てるだらうって思うのね。アイヌの人たちなんて誰も行ってないのよ。うわあ、まだこんなことがあるのって。本当に泣きたいようなことがまだまだありますね。言われている子どもが自分がアイヌだからいじめられているというのは分からないで、いじめられている。

結城：この聞き取りはね、最初、早苗さんでよくて、早苗さんみたいに有名な人たちばかりのところに行き取りに行くよりも、（自分のことを）アイヌと語れなかった人の話も聞きたいと思うわけ。

小川：そうだね。

結城：僕も目立つ仕事やってるからこうやって（アイヌと言えるの）だけど、多くのアイヌの人たちは（言えない）。（北海道庁がアイヌ生活）実態調査やっても、ちゃんとアイヌって言える人たちの数で僕らの人数決まっちゃう。だけど、札幌もっと多くの（アイヌの）人がいるんで、そういう人たちの話も聞きたい。もっと大変だと。早苗さんたちは本当に差別が厳しい（時代を生きて）、早苗さんはそれなりに超えてきた。うちの親父たちも超えてきたとは思っただけど、ほとんどの人たちがまだアイヌって言葉がおっかなくて、アイヌって言われるだけでおっかないっていう人たちがたくさんいる。

小川：教えてない。親たちは子どもにアイヌだってことを。

結城：今、協会に入ってくる若い子たちでも、やっぱり自分がアイヌってわかっている、はっきりしないもんだから。親たちが言わないもんだから。やっぱり迷ってる子たちも多かったりして。僕はたくさんのおっかやって名前も名乗れなかった人たちの話もどんどん聞いていきたいと思う。

小川：私も紹介するから。

結城：ぜひいろいろ紹介してください。

小川：私も85だから、これから継続してやれるって限らないから、やっぱりちゃんとして仕事する人になってほしい。

結城：（聞き取りを）うまくやれるといいなと思う。

小川：そうだね。 本当にそうだね。

結城：札幌って、みんな（出身）地域がバラバラだから、なかなか大変で。でも今のお話みたいに、今から50年くらい前に協会出来上がり、たくさんの人と関わって、第一線に來れない人たちの話もいっぱい聞きながら、この札幌アイヌ協会も大事にしていきたいなと思ってるので。もう札幌で50年も作った時から50年もやったらもうひとつのコタンなんで。

小川：そうなのよね。アイヌの歴史を正しく知ることが必要ですよ。

結城：今時にはちゃんと基金を作ってね。法律は難しいと思うんですよ。だって、憲法を変えなきゃならないから。今までこの国は集団の人たちに、そのお金を与えるっていう法律はないんですよ。だけど、これだけアイヌを認められてきたので基金を作ってその基金を高齢者の人に回すとか。

小川：基金は誰が出す？国が出してくれる？

結城：いやいや、基金はみんなから集めるんですよ。日本全国の人から。

小川：それは日本全国になる可能性があるね。

結城：本当にアイヌの文化を応援したいという人は、僕もいろんなところに行くんで、いっぱいいるんで。年間一口、1000円でも2000円でも出すよって人はいっぱいいるんで。世界からも基金募ったら、少しまとまったお金になって、それをお年寄りたちに使ったりとかっていう考え方もありだと思う。エテケ（カンパ）だって相当のお金が集まるのはその気持ちがある人がでしょ？

小川：1億近くになって。残ってはいないけれども。

結城：昔は学生のために使ったのを、今度お年寄りのために。そのためには、早苗さんみたいに声が出せない人の話もいっぱい聞かないとなんで。さっきも言ったけど、早苗さんも苦しんだと思うんですよ。子どもとか孫とか。みんなそうなんです。それはなぜかって言ったら、なんで孫の代まで傷つくのかって言ったら差別なんです。でも上の世代の傷を癒さない、下の世代が癒されないんですよ。早苗さんの仕事でやってほしいのは僕は何回も昔から言うけど長老会作ってほしいんですよ。僕ら長老文化なのに長老会がないっていうのは海外の先住民と比べたらアイヌだけなんです。どこの国に行ってもまず長老に挨拶に行くんです、先住民は。

小川：そうですね。

結城：でも、ここは協会とかに行くけど長老ではないんですよ。だから（本当なら）札幌に海外の人が来たら、長老に挨拶に行って。この土地でちょっとお世話になりますって、そこから始めるんだけど、その長老文化がずっと作ってこれなかった。今僕本部の理事もやってますけど、まずは長老会を作るっていうことと、あと議会を作ってほしいと。

小川：本当ですね。

結城：議会を作ることと長老会だけは僕は作ってほしいと思う。あとは基金を集めることができると思う。年金と、アイヌは長老文化なんで、長老文化だからその長老たちがちゃんと過ごせるような基金を作ったらいいんじゃないかなと思うんですよ。今は心ある人、世界中の人たちに寄付をもらって、それがアイヌの長老たちのための心を癒すための（財源）になると。

小川：（ある女性が）大学出てお付き合いしてた彼の両親のところに結婚するって挨拶に行ったら、（相手の両親はその場で）向かっては言わなかったけど、帰った後に息子に「アイヌの血が入っている人はうちの嫁には出来ない」って。

結城：まだそんなこと。

小川：今の話だよ。昔のことではない。

結城：自分たちのアイヌの血を誇るようにするには、（下の世代が）急に目覚めるとかじゃなくて上の人たちが癒されたりそういうことをしていかないとだめなんです。長老を大事にするという文化を活かさせないとダメなんですよ。今の日本がお金で物事を語るような世の中になったんで、やっぱりその中で、仲間を守り合うとか、長老を守り合うなんていう文化を復活させないと意味がないんですよ。だから僕はいろんな人の話を聞きたいと思って率先してやってるんですよ。ほかにね、なかなか言えなかった亡くなった人もいっぱいいるじゃないですか。

小川：そうなのよ。会員に、今子どもたちはどんなことで困ってて、どんな喜びがあって、運動会に走れて1等になれたとか（を聞いて）。海水浴をするようになったのは、学校で裸になって泳げない。それでどうしたらいいかということで、父さんと相談して海水浴を組み立てたんですよ。

結城：今、海水浴も行かないですからね。だから、長老会っていうものをただ作るのではなく、その長老会は年に1回でも2回でも、僕らの（札幌アイヌ協会の）役員会と合致して、例えば、長老なりに意見があるでしょ。それを僕ら役員会は聞くというシステムを作りたい。そうすると、いわゆる先輩としてのアドバイスとして、言葉に変えられるんです。

小川：人間の価値観が変わってきてると思うの、私。困ったなあと思って。

結城：日本には長老会がないので、長老むしろお年寄りを邪魔にするような傾向があるんで、僕らは長老会を作って長老会を大事にするみたいなイメージでちょっとやりたいなと思って。長老会っていう名前があれば、基金を作って年金の代わりじゃないけれどお年寄りたちについていうことも動けるなど。ただ長老会っていうとなんかみんな嫌がるんだけど、僕はやってほしいな。アイヌは長老文化なんで、エカシ・フチの文化なんで。

小川：これ以上、社会と関わるのしんどいと思うけど、私も。私の作品みんな見てって。

結城：では、最後にそれを見て帰ります。

<移動>

小川：私は自分の美術館を、資料館を作ろうとしています。それは三石に。その方向に作品の整理がされていて、みんなに安心させられるようなことはしてないかもしれない。これ、おじいちゃんが獲ったクマ。戦中、戦後、私が敷布団に敷いて寝てました。私が結婚して刺繍するようになったら、母さんが持ってきました。

結城：なるほど。

小川：これは樺太のクマですね。これラッコです。鮭の皮もいます。

結城：それユク（鹿）ですね。

小川：それも誰かから分けてもらって。

小川：こんなものね、地下歩行空間に展示してほしいって言うてるんですよ。納品するのに整理しながら。これOさんの。

結城：角袖なんですか？

小川：旭川のね。

結城：袖が変わってますね。

小川：ワッカウエンベツで作られた着物です。

結城：なるほど。

小川：これは樺太が私ですね。これは妹ですね。なんかもう必死で生きてきた。

結城：もう立派な博物館ができますよ。

小川：楽しみ。自分たちの悲しみを忘れて。